



シンガポールでの『アバター』体験

本記事をお読みになる先生方は、『アバター』という映画をご覧になられたことはありますか。『アバター』は、我が国でも海外ブラックバスターとして絶大な人気を集めました。全世界的にはあの『タイタニック』や『ハリー・ポッター』を抜いて興行収入1位の映画のようです。この映画は、西暦2154年の地球から遠く離れた衛星パンドラで行われる、先住民ナヴィ族とその先住民と人類のDNAを融合し作り上げた青い肌の「アバター」との争いを描いています。SF映画らしい独特なストーリーと、美しく具現された映像世界が、人気を集めた要因になったのかもしれませんが。

『アバター』は、映画の興行収入だけでなく、DVDおよびBlu-ray、ゲーム、関連グッズやテーマパークのアトラクションから多額の収益をもたらし、メディア・フランチャイズとしても知られています。2011年に映画のテーマパークを作る計画が発表され、2017年にアメリカフロリダ州オーランドのウォルト・ディズニー・ワールド・リゾート内に「パンドラ：ザ・ワールド・オブ・アバター」がオープンしました。さらに、2011年にはアメリカ・シアトルで「アバター展」が初めて開催され、アメリカとカナダの全域を巡り、その後世界規模の巡回展となりました。2016年に台湾・台北をはじめ、2022年にシンガポールで開催が決定され、私は先日シンガポール国立公園、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイの「クラウドフォレスト」で開催されている「アバター：ザ・エクスペリエンス」に行くことが

できました。

開催地の「クラウドフォレスト」は、シンガポールの観光名所の一つで、熱帯高地の植物や室内では世界最大級の滝があることで知られています。入場すると、クラウドフォレストと映画の世界観が絶妙にマッチし、作品に登場するドラゴンやパンドラの山岳地帯に生息しているとされる、空中捕食動物マウンテンバンシーの等身大の像が作品から飛び出したように出迎えてくれ、一気に別世界に入ったような気分させてくれます。



クラウドフォレストの入り口にいるマウンテンバンシー

そしてさらに奥へ歩いていくと、3メートルの身長を持つという設定のナヴィ族やアバター特有の青い肌の人形、動植物が本物の木の葉と完璧に溶け合っているのが見えてきました。クラウドフォレスト内にある、石を展示した「クリスタルマウンテン」エリアには、高さ6m、幅7.5mで原寸大のアニマトロニクスマウンテンバンシーも展示されており、迫力満点でした。1時間に数回、5分ほどバンシーの赤ちゃんが登場するのですが、機会を

逃してしまい会うことができずとても残念でした。

パンドラの夜を体験できるシアターは、特に忘れられないものとなりました。作品では精霊の宿る「魂の樹」がパンドラを守っているとされていますが、とても幻想的な映像で、最も記憶に残るシーンの1つなのです。天井からぶら下がっている、蔓に似た長く光る「魂の樹」を通り過ぎ、シアターに入ってきました。この展示会では、昨年公開された続編『アバター ウェイ・オブ・ウォーター』の設定がいち早く反映されており、写真に写っているのは作中に登場する水中生物のオブジェです。



シアターの巨大スクリーン

さらに、アバターの世界観を体験できるアクティビティがいくつもあり、「Fly a Banshee」というミニゲームが私のお気に入りでした。バンシーフライトシミュレーターで、来場者はVRシミュレーションを使い、自身も映画内のバンシーと同じように飛行を体験することができるのです。腕と体の動きをセンサーで捉え、飛行方向を変えることができたり、自分の顔写真がキャプチャされAIテクノロジーを使用して、尖った耳を持つ青い肌の人型生物に変換できるブースもありました。また、「ファイヤーポッド」エリアに入ると自分の影がスクリーンに投影され、ナヴィ族が持つ独特の尻尾が生えたように見え、不思議で楽しかったです。



「Fly a Banshee」でプレイ 私のアバター姿

私はここで、映画で登場する野生動物や植物、ナヴィ族の文化に触れながら、映画を見た時の感動がよみがえり、思い出に残る楽しい経験をすることができました。この展示会のために1年半かけて開発された機器もあり、創り込まれた世界観は映画ファンだけでなく、映画製作やセットデザインなどに興味がある人にも楽しめるものとなっています。また、この国立公園には世界中から集まっためずらしい植物も多数生息しているので、植物愛好家にとっては素晴らしい場所です。シンガポールでの巡回展は、2024年1月1日で終了してしまいます。まだ訪れたことがない方は、ぜひ行ってほしいと思います。

著者紹介



Ms. Charmaine Ow
(チャーメイン・オウ)

GIP ASEANマレーシアのシニア・パテント・エンジニア。1990年マレーシア、クアラルンプール生まれ。アメリカのインディアナ大学で生物工学を専攻し、2013年卒業。2017年、マレーシアの弁理士試験に合格し、特許・意匠・商標弁理士の資格を有する。2013年ピintas・コンサルティング・グループに参加。2017年GIP ASEANのメンバーとなる。

編集者紹介



魯 佳瑛 (ノ・カヨン)

日本弁理士、弁理士法人 新樹グローバル・アイピー所属。1981年韓国ソウル生まれ。ソウルの成均館大学卒業。2006年よりソウルの特許事務所での知的財産分野のキャリアをスタート。結婚をきっかけに来日。2014年日本弁理士試験合格。専門は、商標・意匠。